

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04268

研究課題名(和文) 演劇ワークショップの教育的役割とファシリテーター育成に関する日中台比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Japan-China on Educational Roles and Facilitator Training in Theater Workshops

研究代表者

中山 文(Fumi, Nakayama)

神戸学院大学・人文学部・教授

研究者番号：30217939

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は中国・台湾の先例を利用して日本の学生のコミュニケーション能力や自主性を涵養する演劇教育プログラムの構築を目的とした。主な成果は以下の3点である。

桂迎浙江大学教授(Pro.GuiYing)の指導により、学生向け演劇ワークショップと上演を行い、教材DVDを作成した。日本の演出家(小原延之、棚瀬美幸)の指導により、学生向け演劇ワークショップと上演を行い、教材DVDを作成した。林メイ君台南大学教授、桂迎教授を招き国際シンポジウム「大学生における演劇教育の効果とファシリテーターの役割 日本・中国・台湾比較」を開催した。多くの学生が「演劇で成長した自分」を高く評価している。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to construct a theatrical education program to cultivate communication skills and enhance autonomy of Japanese students using precedents from China and Taiwan. The following three could be listed as major achievements: 1) Held a workshop for the students and staged a play under the guidance of Prof. GuiYing of Zhejiang Univ. Recorded DVD as teaching material. 2) Held a workshop for the students and staged a play under the guidance of Nobuyuki Ohara and Miyuki Tanase, Japanese theater directors. Recorded DVD as teaching material. 3) Organized an international symposium titled "Effects of theatrical education and the role of the facilitator" inviting Prof. Meijun Lin of Tainan Univ, and Prof. GuiYing as panels. Large portion of the students confirmed growth as a person through theatrical activities.

研究分野：中国文学・演劇

キーワード：演劇教育 日本中国台湾比較 演劇上演 ファシリテーター 演劇ワークショップ コミュニケーション能力
ジェンダー教育 民族アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

・日本における演劇教育

近年、子供たちのコミュニケーション能力向上を目指して、演劇を授業に取り入れる中学・高校が増加している。大学教育においても、大阪大学では大学院の共通教育として、一橋大学ではキャリア教育科目として取り入れており、北海道教育大学などの4教育大学は共同でコミュニケーション能力育成プロジェクトを立ち上げている。このように先進的な大学では様々な形で演劇を教育カリキュラムに取り込んでいる。

しかし日本では、演劇の教育効果はまだ一部の専門家の認識にとどまっており、その学術的理論が広く受け入れられるには至っていない。さらに指導者不足という問題もあり、演劇が大学の教育現場で広く普及しているとは決して言えない状況が続いている。

・中国における演劇教育

21世紀に入り、急速に社会状況が変化した中国では、自分の役割にふさわしい振る舞いのできる人材の育成が喫緊の課題とされており、その現状を解決するために演劇教育に注目が集まっている。上海戯劇学院では、1999年に孫恵柱教授が「社会表演学 (social performance studies)」を提唱し、2005年には当学院の戯文系の中に演劇教育コースが設置された。また1995年から浙江大学で一般学生に向けて演劇指導を行ってきた桂迎教授は、自らの教学経験をもとに、演劇によって「学生たちは社会性と他者への思いやりが富み、チームプレイができる人間に育ち、卒業後は有為な人材として国内外で活躍している」と断言する。桂教授は20年間指導してきた学生演劇サークル黒白劇社の活動を通じて、演劇のもつ教育効果を確信しているのだ。

・台湾における演劇教育

アジアでもっとも演劇教育が進んでいるのは台湾であろう。1997年発布の「芸術教育法」には、教員免許に必要とされる芸術教育に演劇ジャンルが付け加えられた。その指導的役割を果たしているのが国立台南大学芸術学院であり、ここでは英米に学んだ演劇教育プログラムが蓄積されている。さらに、林玫君教授が開発したプログラムは、台湾人としてのアイデンティティ教育やジェンダー教育の手法として幼児期から広く学ばれている。

2. 研究の目的

近年、大学生でも内向的で人見知りを自認する学生が増加している。彼らが緊張することなく人前で自分の意見を発表できるリラックスした環境を作り上げることは、教室における学びの効率を上げるために重要である。

「身体を動かしグループで討論し、全員で一つのことをやり遂げる。その過程での喜びを共有することによって、心を開いて積極的

に発言できる場を作りあげ、人前でも過剰に緊張することなく自分を主張し他者と交流する人間性を獲得する。」この理想的な人間性獲得をめざして、イギリスで始まった教育演劇は、今や欧米だけではなく、香港・台湾でも大きな注目を集めている。だが、本当に演劇教育は学生の人間性を涵養することができるのだろうか。また、他国でその教育方法が成果を表しているとして、同じ方法が日本でも有効なのだろうか。

本研究の目的は、日本の大学教育においても演劇ワークショップや演劇上演がもたらす教育効果について検証することと同じ東アジアの国である中国と台湾の演劇教育を学び実践的に取り入れることで、有効な演劇教育プログラムを構築することである。具体的には以下の3点を目標とする。

1) 「演劇を用いた教育実践は、学生のコミュニケーション能力や社会性の育成とどのように結びついているのか？」

この問題に理論的裏付けを行い、また「それらの能力の向上を誰が、どのように評価すべきなのか？」についての検証を行うことを第一の目的とする。

2) 「日本に先行する中国、台湾の演劇教育の手法を、日本の教育現場に取り入れることは可能か？」

よしんば他国で行われている演劇教育がその国の学生にとって効果的であるとしても、同じ方法が日本の学生に有効なのだろうか。学生の文化的資質を考慮すると、欧米よりも類似点の多い東アジアの国に学ぶ方が効率がよいと考える。中国・台湾の先例を利用し、日本の学生のコミュニケーション力・プレゼンテーション力・想像力・集中力を涵養する演劇教育プログラム構築を第二の目的とする。

3) 「演劇を専門としない教員がその手法を教育に取り入れることは可能か？」

演劇を専門とする指導者がいない教育現場で上記プログラムを実行するためには、教員がファシリテーターとしての技術を学ぶことが必要である。これを可能とするための教材としてDVDを作成する。

3. 研究の方法

研究方法としては以下の3点をあげる。

1) 日中台の教育現場で行われている演劇ワークショップの実態とそのカリキュラムを把握する。具体的には、中国学生演劇指導の第一人者である桂迎教授ならびに台南大学芸術学院の林玫君教授をファシリテーターとして招聘し、協働して演劇ワークショップの実践研究を行う。実際にワークショップを経験した学生にとってどのような教育的効果があったのかをアンケート等によって検証する。

2) 中国ならびに台湾で実践されている演劇ワークショップが日本の教育現場でもそのまま再現可能かどうか、テーマやすすめ方

の点で日本の学生に適合するかどうかを、実践をふまえて整理し、より体系的で汎用性の高い教育メソッドをうみだす。そのために、まず日本で行われている演劇教育を実体験する。

具体的には、日本の教育演劇の現場を熟知するファシリテーターを招き、演劇ワークショップの実践研究を行う。実際にワークショップを経験した学生にとってどのような教育的効果があったのかをアンケート等によって検証する。

3) 日中台における演劇ワークショップ実践におけるファシリテーターの役割と育成方法について体系的に整理し、日本の教育現場に適合したファシリテーター養成プログラムの構築をめざす。

具体的には桂教授、林教授、日本人ファシリテーターのワークショップ実践はすべて録画した上で、その教育的効果を考察する。日中台のワークショップの特徴を比較検討することにより、日本の学生に適合する新たなワークショップモデルを開発する。ワークショップの録画映像は、ファシリテーターに求められるスキルの観点からDVDに編集し、ファシリテーター育成の指導マニュアルとして普及する。

4. 研究成果

1. 中国、台湾とのネットワーク作り

上海戯劇学院訪問し中国の教育演劇関係者との関係作りを行った。(2015年)

浙江大学で招待講演会の開催：学生演劇サークル黒白劇社25周年記念行事として、研究分担者伊藤茂が学生が日本演劇に与えた影響についての講演を行った。また演劇が一般学生に与える効果について、黒白劇社指導者の桂迎教授と意見交換を行った。(2015年)

2. 中国、台湾の教育演劇事情理解

孫慧柱上海戯劇学院教授インタビュー。

小中学校の教育演劇指導者を養成している上海戯劇学院の状況について、孫慧柱教授にインタビューを行った。教授によると、表現力・コミュニケーション力の養成に演劇が有効なのは明らかである。しかしその普及には大きな困難があり、中国はもちろん、世界でもっとも教育演劇先進国のノルウェイでさえも具体的な普及率が示されていない。中国では演劇教育教材として、国内外の名著を舞台化した台本を作成中である。さらに教育演劇の価値を知らしめるには我々研究者が学会発表を通して研究の成果を蓄積するしかないことを教えられた。(2016年)

台北芸術大学演劇系徐亜湘教授による講演会「プロの演劇から人々の素養へー台湾演劇教育の60年」を開催し台湾教育演劇の歴史を学んだ。(2016年)

台南大学林政君教授を訪問し、台湾における教育演劇の現状についてレクチャーを受講。博物館で台湾人アイデンティティにつ

いて学ぶという「アプライドドラマ」授業の具体例を教授していただいた。(2016年)

山崎理恵子氏講演会「中国、台湾、香港における演劇教育の状況」を開催した。氏は1990年代に中央戯劇学院初の俳優学科本科に日本人としてはじめて留学し、その後香港と台湾で劇団を立ち上げた経験をもつ。俳優科のカリキュラムや卒業発表会の事情など、一般の学生が舞台人として成長するシステムを紹介した。

3. 日本の教育演劇理解

福岡ドラマ教育研究会「前進！コミュニケーション活動をいかした学びの方法」参加。国内の小中学校で行われている教育演劇の実情を学んだ。(2015年)

国内における演劇ワークショップへの参加を通して「ドラマを通して教育をみる」ことを目標とする日本演劇教育会関西支部と情報交流を行い、日本国内における教育演劇の状況を学んだ。国内では日本大学を中心に獲得型教育研究会が活発な活動を行っており、すでに東京や京都の総合私立大学では、積極的にアプライドドラマを授業に取り入れていることを知り、本研究テーマの重要性を確信した。(2016,17年度)

4. 演劇ワークショップ、上演会の実施

ワンチョンの演劇ワークショップと日中演出家会議の開催。グローバルに活躍する北京出身の演出家ワンチョンを招き、コミュニケーション能力向上を目指して演劇ワークショップを行った。また、日本の演出家3名(棚瀬美幸、ごまのはえ、笠井友仁)との座談会を行い、各国の若者の演劇状況について情報を交換した。(2015年)

桂迎浙江大学教授による本学演劇ワークショップと公開上演。浙江大学黒白劇社の指導者である桂迎教授を本学に迎え、2,3,4回生の中山ゼミ学生を対象に各5回の演劇ワークショップを行い、成果発表としてホールでの上演を行った。授業内容と発表会の模様を撮影した。授業後のアンケート調査により、学生たちはこの一連の授業により、主体性が著しく鍛えられたと回答している。(2016年度)

日本人演出家による学生の演劇上演。

二人の演出家(小原延之氏、棚瀬美幸氏)にゼミ生3年生と2回生をそれぞれ担当してもらい、前期15回の授業時間で演劇作品を作った。「演劇ワークショップで身体を動かす 戯曲を書く 声を出す 試演会としてリーディング講演を行う 反省会 戯曲の再構成 舞台上演」のスケジュールで、7月に学内の小ホールで発表会を開き、「居場所」をテーマに、2回生2作品(「丑三つ時の男」「ボクライロタイムカプセル」)、3回生1作品(「ここから」)が披露された。地域の方にも解放され、約150名の観客を集めた。(2017年度)

5. 国際シンポジウム「大学生における演劇教育の効果とファシリテーターの役割 日本・中

国・台湾比較」を開催した。第1部「大学生における演劇教育の効果」成果発表会では、2,3,4年生がこれまでの「演劇教育から学んだこと」についてプレゼンテーションを行った。また小原、棚瀬両氏が「大学の演劇授業におけるファシリテーターの役割」のテーマで報告を行った。第2部「日本・中国・台湾における教育演劇事情をめぐって」では桂迎(中国・浙江伝媒大学教授)「中日教育演劇ワークショップの比較と考察」、林玫君(台湾)・台南大学教授)「21世紀における演劇教育の一及び台湾演劇教育の発展について」の講演を開催。その後、シンポジウムを行った。第3部では2回生が「アタシノアカシ - 新年明石伝説物語」をマナビーホールで上演し、地域の方にも開放されて約50名の観客を集めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

中山文「上演がもつ教育効果をめぐる一考察」教職教育センタージャーナル 第4号 査読なし 2018年3月

中山文「ゼミ教育における教育演劇の実践と効果 - 演劇ワークショップから上演発表会へ」教育開発センタージャーナル 第8号 査読あり 2017年3月、57-71頁

中山文「演劇」中国年鑑2016 2016年5月 査読あり 217-219頁

中山文「“七月の精”から“かぐや姫”へ」図書新聞3279号5頁 2016年11月

中山文「中国女性演劇の今」中国女性史研究25号83-89頁 2016年

中山文「中国演劇と大学生」京劇ニコニコ新聞80号2頁 2015年10月

中山文「演劇」中国年鑑2015 2015年5月 査読あり 219頁-221頁。

〔学会発表〕(計3件)

伊藤茂「近代劇と女優 貞奴と須磨子を手がかりに」2017年12月 第6回 大蔵谷ヒューマンサイエンスカフェ

伊藤茂「私の日中演劇交流史」北京外交学院講演会 2016.6.27 中国北京外交学院招待講演

伊藤茂《試論日本戯劇的多様性》第三回 校園戯劇文化節兼黑白劇社25周年記念活動 2015.6.6 浙江大学招待講演

〔図書〕(計6件)

中山文編著『大学生における演劇教育の効果とファシリテーターの役割 日本・中国・台湾比較国際シンポジウム報告書』DVD(「アタシノアカシ - 新年明石伝説物語」上演ビデオが収録されているため、

DVD形式で刊行)2018年
小浜正子、中山文等『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会 2018年
大野寿子編中山文等著『グリム童話と表象文化 モティーフ・ジェンダー・ステレオタイプ』2017年 総429頁
服藤早苗・新實五穂編中山文等著、『歴史のなかの異性装』勉誠出版 2017年 総272頁
小浜正子編中山文等著、『ジェンダーの中国史』2015年 勉誠出版 総294頁。
中山文編著『越劇の世界 中国の女性演劇』2016年 総291頁 水山産業出版社

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

・ホームページ

地域研究センター研究活動ニュース

http://www.kobegakui.n.ac.jp/~card/chiiki/akashi_gp.html

・DVD

1)「2015年度ワン・チョンの演劇ワークショップ」2016年1月22日

2)「2016年度 桂迎演劇ワークショップ - 」2016年

3)「2016年度中山ゼミ2・3年次生合同演劇発表会」2016年7月25日

4)「現代漢語散文朗読」2016年6月19日

5)「2017年度 中山ゼミ演劇発表会」2017年7月17日

6. 研究組織

(1)研究代表者

神戸学院大学・人文学部・教授

中山文(Nakayama Fumi)

研究者番号:30217939

(2)研究分担者

神戸学院大学・人文学部・教授

伊藤茂(Shigeru Ito)

研究者番号:90122241